蓄音機を用いたコミュニティーにおける 世代間交流のための回想法の試み

高橋浩子*

Reminiscence Using Gramophones for Age Exchange in Community

Hiroko TAKAHASHI

Nowadays, the use of reminiscence is getting popular in nursing home and geriatric ward. There are many kinds of reminiscence methods for applying to individuals, to groups, and there are some different purposes of reminiscence for a therapy for dementia, an activity, age exchange and so on. Since 2000, we are coordinating gatherings of reminiscence using gramophones for age exchange in community. This paper reports our practice and episodes during these years and what we learned from our activities.

key words: reminiscence, age-exchange, community

回想法グループの活動に至るまで

Butler, R. L. によって 1960 年代に提唱された高齢者のための回想法は、近年さまざまな施設で行われるようになってきている。この回想法の形式にもさまざまなものがあり、個人を対象として行われる個人回想法、集団で行われるグループ回想法などがあり、その目的も治療のための回想法、アクティヴィティとしての回想法などが挙げられる(黒川、2005)。本報では、我々が 2000 年以来、年間 1 回から 3 回を目安に継続してきた、蓄音機を用いた地域における世代間交流のための回想法の集いについて報告する。

我々が数名で立ち上げた山手心理研究所の主な業務は、地域における親子相談と、2週間に一度のペースで行っている「暮らしに役立つ自律訓練法講座」という名称の自律訓練法の集団指導、心理教育のための講演活動などである。さらに上記の活動以外、地域のために何か継続的にできることはないかと考えた。地域で何かを行うときに、企業、大学等

の背景のない予算的にも小規模な民間組織ができる ことは、非常に限られている。しかし活動地域にお いても高齢化が進んでいるので、できる範囲で高齢 者のために何か企画をすることはできないかという 声が上がった。当時, すでに我々が始めた自律訓練 法のグループにおいて,中高年の参加者たちが,自 律訓練の指導の後に、それぞれが抱えている慢性の 病について自らが語ることができる機会を, 2週に 一度持つことができるということが、とても心の支 えになっているという声があった。参加者は、共通 の症状があるわけではないが、症状についてのみな らず、2週間の出来事を振り返ったり、昔起こった 出来事を振り返ったりする機会を与えられること や,他の参加者の話が刺激になり,自分の記憶をた どって改めて語る機会を与えられることが、症状の 緩和につながっていると思うと答えている。Kleiman (1998) によれば患者の話に耳を傾けるという ことは,「病を個人史における主題へと作り変える 患者の人生物語を共感をこめて解釈すること」であ り、臨床家は、患者にとって「そのままでは脅威を

^{*} 白梅学園短期大学心理学科

与えることになる現実から距離をとるために病に輪郭を与えるような物語に耳を傾ける」としている。 そこで、このような場所を積極的に持つことはできないか、特に高齢者のための回想法の集いを企画できないかと検討に入った。

ただし、認知症を対象にした回想法については、受け入れ態勢に無理があると思われたため、当初は一般の高齢者を対象に焦点を絞るという計画を立てた。回想法を行うために、現在「回想法への招待」(野村・黒川、1992)などの写真セットが販売されている。当時、我々が持っていたものは、数台の蓄音機、レコード、古い雑誌などであり、これらを用いて回想法を行ったらどうだろうかと発案があった。2000年3月に試験的に蓄音機を使った集いを試験的に行った。しかしながら、蓄音機や音楽を媒介にした回想法の継続ということを考えると、方法論についてより工夫していく必要があると思われた。

ロンドンでの見学 回想法が、具体的にどのように 活用されているのかを見るために、2000年にロン ドンの回想センター (Age Exchange and Reminiscence Centre, 代表 Pam Schweitzer) に見学を 申し込んだ(高橋・高橋, 2001)。 ロンドンのセン ターを見学先に選んだのは二つ理由からである。第 一に, その回想センターが, 回想法の分野では非常 に有名であり実績があること, もう一つはロンドン の回想センターの場所を調べるうちに, 交通手段, 地理的条件が、我々が活動している地区に似ている と感じたからである。高齢者にとって、何かに参加 する際, 交通手段, 地理的条件が影響を及ぼすこと は十分考えられた。センターを実際に訪問してみる と,回想法はもちろんであるが,回想法を行ってい る環境設定に非常に心をひかれた。センターの入り 口は、骨董屋と間違うほどに、古いものが置かれて おり、図書と喫茶コーナーが設けられ、そこで簡単 な食事ができるようになっていた。奥には、バリア フリー化された研修室, 記録の編集室などが設けら れて、古いものと新しいものが、高齢者にとって使 いやすいよう設計され、配置されていた。また高齢 者を取り巻いているスタッフを含めた人的環境につ いて考えさせられた。回想法が行われるセンターに は、たくさんの若者がスタッフとして働き、また、 喫茶コーナーでは, 高齢者がボランティアでお茶を

入れ、若い親子づれの接客をしていた。センターの 中の高齢者を観察するうちに、その行為一つ一つ が、じつは高齢者にとって回想のきっかけになって いることに気がついた。代表の Pam Schweitzer さ んから自分たちの行ってきたことが、専門家によっ て認知症への効果が期待されるという裏づけがなさ れることは、非常に喜ばしいというお話をうかがっ た。また、センターの活動に高齢者自身が積極的に 活動することが、自尊心を取り戻すのに有効である ということだった。イギリス人も、日本人と同じく, 自分のことを話すのは苦手な人が多く, 最初は, 「何 も話すことがありません」と答える人も珍しくない というお話など、興味深い実例を数多くうかがっ た。センターを見学し、話をうかがううちに、我々 は高齢者のみを集めた回想法という形に縛られず, より自然な形での展開はできないかと考えた。世代 間交流のための回想法の集いを行うという発想はこ こから生まれた。しかし、実際にスタッフ以外に、 回想をする場所に初対面の異なる世代が交わるとど うなるのか、より調査する必要があると思われた。

この問題のヒントを得るため、我々は、ロンドン にあるもう一つの別の団体を訪問することにした。 コンタクト・ザ・エルダリー (Contact The Elderly, 代表 Trevor Lyttleton) というこの団体は, 1965年の設立以来,メディアやホームページで, 「年に一度, 日曜日の午後に孤独な高齢者のために, 自宅の居間でお茶をご馳走してくれませんか」、「日 曜日の午後に高齢者をお茶会の会場まで送ってくれ る運転手になってくれませんか」という広告を載せ ている。活動内容はこれだけである。広告にある 「年に一度」というのは、 当事者が、 負担に思わない ようにする配慮であり、やってみようと思わせるに はどうしたら良いかを考えてのことである。実際 は,一度高齢者をお茶に招いた家族は,この団体の 趣旨にあらためて賛同し、数カ月に一度は参加して くれるとのことである。運転手のボランティアは, タクシーの運転手からの申し出が多いそうである。 私たちが知りたかったのは、現実に一般の家庭に見 知らぬ高齢者を招き, 短時間の接触をして話をする ことが、高齢者と若い家族にどのような影響を与え るのかということであった。支部の責任者である Monica Hartwell さんは、私たちの多岐にわたる質 問に非常に熱心に答えてくれた。

活動の効果であるが、第一に、お茶に招き知り合うことで、街で人々が顔見知りになる機会が増え、声を掛け合うようになった。一人暮らしの高齢者が入院したとき、見舞い客が訪れたり、お葬式のときには、街の人が集うようになったという当初は考えもしなかった効果があったとのことだった。単純に孤独な高齢者のための活動だったものが、最終的にコミュニティーの再生につながったのである。

個人レベルでは、お茶に招いてもらった高齢者が、その家の小さな子供たちと話したり相手をしたりすることで、自分が社会の中でまだできることがあるという発見の場にもなった。また招待した側は、自分ではゆっくり聞いてあげられない子供の話を、高齢者が聞いている姿を見て、子供との接し方について考えたり、学んだりしたことがあったという。ロンドンで始まったこの活動は、今はイギリス全土に広がっている。

この二つの団体のスタッフから、貴重なアドバイスをいただいた。一つ目は、もし集う場所を選べるのであれば、新しい建物よりも、高齢者にとって地域でなじみのある、教会、学校、幼稚園などを選ぶこと。これは場所そのものが回想のきっかけになるからである。もう一つは、とにかく活動を継続するということである。

世代間交流のための回想法の実践 実際に活動の場所を選択するに当たって、地域で50年以上の歴史のある幼稚園の記念館をお借りすることにした。最初の参加者は、その幼稚園の関係者と、自律訓練法のグループのメンバーとその関係者であった。この会を始めるにあたって、参加者には我々がロンドンで見聞きしたこと、それをもとにした世代間交流のための回想法の場を持とうとしていることについてのお知らせを配布した。

このようにして蓄音機を使った世代間交流のため の回想法の集いが始まった。以下に経過と手続きを 述べる。

実践期間と回数 2000 年 3 月から 2006 年 12 月 まで計 10 回

場所 横浜市 N 幼稚園の記念館

準備 会の日取りが決まったら、参加者に葉書で連絡をする。その際リクエストとその曲にまつわるエピソードの募集を呼びかける。その季節に応じた回想についての文書も受けつける旨連絡を行った。

運営費 この会の運営は、参加者の寄付で行っている。参加費という形ではなく、蓄音機のレコード針の購入やレコードの購入のための寄付ということで会場後方にある募金箱に募金を募る形でこの6年間運営している。

準備する備品 蓄音機数台(会場には2台から3台を運搬する)、SP盤のレコード、SP盤の曲にまつわる資料(古いポスター、映画の雑誌、戦前からの新聞記事のスクラップなど)お茶(暖かいもの、冷たいもの、カフェインなしの飲料など)、手作りのケーキ、クッキーなどの食べ物、お茶道具(紙コップ、紙皿など)その他 おもちゃ ベビーベッドなど(乳幼児をつれた親子が突然参加した場合のためにあらかじめ幼稚園からお借りする)

蓄音機を用いる場合の注意点は、初めて実際に触る人に蓄音機を廻してもらった場合、故障することも予測して何台か用意する必要がある。レコードは78回転のSP盤を用いる。厚みがあって一見丈夫であるが、金属の針で溝が深くほれていくため、消耗する。よってリクエストの多い曲は、何枚か同じレコードが必要になる。機械のメンテナンス、簡単な修理(調整)は自分で行えるようにしておく必要がある。回転数調整のためのストロボスコープ盤も必需品である。

時間設定 時間の枠は、活動当初から今まで、午後の1時半から3時半である。ゆっくりお昼を食べて参加してもらい、日没までに帰れるように設定してある。経験上、高齢者の参加者は、来るときのことより、帰り道を心配する。参加者から聞いたところでは午前は、家事に追われることが多く、午後が望ましいという希望が多かった。時間的な設定は、かなり大切な要素であると考えられる。

曲目 音楽のプログラムは、こちらで決めておく。 ただし曲目に関しては、あらかじめリクエストを取る。会の最初のころは、曲目は、参加者の年代を参 考にし、若いときに流行していた曲から選択した。 また、それにまつわる資料(映画のポスター、映画 雑誌など)を集めておいた。

会場セッティング 蓄音機を中心に半円状に椅子を並べる。両側サイドに、荷物置き場やお茶を飲むためのテーブルと、回想法のための新聞など古い資料を置くためのテーブルを用意する。壁には、ポスターなど資料をとめる。また草花などを飾る。後方

| | テーマ | 主な曲目 | 参加人数 (子供の数を含まず) |
|------|-----------|-----------------------|--------------------|
| 第一回目 | 映画音楽 | 会議は踊る,ライムライト,ローレライなど | 6 名 |
| 第二回目 | シャンソン | ばら色の人生など | 18 名 |
| 第三回目 | 秋をテーマにした曲 | 枯葉, ロマンス, 蘇州夜曲など | 11 名 |
| 第四回目 | 映画音楽 | 黄色いリボン,駅馬車,道など | 14 名 |
| 第五回目 | クリスマス | ジングルベル, ホワイトクリスマスなど | 16 名 |
| 第六回目 | クリスマス | 菩提樹,赤鼻のトナカイなど | 9 名 |
| 第七回目 | クリスマスと合唱曲 | アベマリア, きよしこの夜など | 6 名 |
| 第八回目 | 映画音楽 | 慕情, エデンの東, モンマルトルの丘など | 22 名 |
| 第九回目 | ダンス | ラ・クンパルシータ、黒い瞳など | 16 名 |
| 第十回目 | 歌劇と映画 | メリーウィドー,リラの花咲くころ | 19 名 |

表1 各回のテーマと主な曲目、および参加人数

のテーブルに感想カード (このコンサートに参加した感想, 思い出された過去の記憶がありましたら教えてくださいというような設問がある), 次回用のリクエストカード, 募金箱をおいてある。

流れ 参加者とは、入り口受付で挨拶を交わし、氏名住所など記入してもらい、その日のプログラムを手渡す。オープニング曲「庭の千草」を流し、会の始まりを知らせる。曲は、演奏者は変わっても、たいていは「庭の千草」というように決めている。参加者は、その曲が聞こえると、席に座る。司会が始まりを告げる。司会は、前回でリクエストを受けた曲をながすとき、それにまつわる話を参加者に記入してもらったり、あらかじめ紙に記入してもらったり、あらかじめ紙に記入してもらったり、あらかじめ紙に記入してもらったもておいた季節にまつわる思い出を読み上げる。蓄音機を廻す際には、参加者にもなるべく触れてもらう機を廻す際には、参加者にもなるべく触れてもらう機をであために、スタッフが新しい参加者に声をかけ付き添って誘導する。およそ15曲ぐらいの間に休憩を二度とり、参加者の交流を図る。

10回のテーマと主な曲目と参加人数は表1のとおりである。

曲の合間に、趣旨に賛同したバイオリニストが飛び入りで2曲ほど演奏してくれた回があった。曲を聴くだけではなく、楽器を本当間近に見られた経験は、参加者には刺激的であったようで、お茶の時間と会の終了後には、楽器にまつわる話に花が咲いていた。

参加者が回想したこと

以下は、参加者が回想した内容である。

• 看護学生時代に患者さんの家にキャンドルサービ

スを行いました。そのとき「ああベッレヘムよ」と「まきびと羊を」を歌いました。そのときの懐かしい思い出がよみがえってきて、そのときに戻った感じがしました。(60 代女性)

- ・小学校のときと、大学のときにクワイアでうたっ たクリスマスキャロルを思い出しました。(20代 女性)
- ・高校時代まですごした九州の実家の風景,学校までの道のり、よく遊んだ場所が思い出されました。子ども会のクリスマス会とか、共同浴場、お風呂の香りとか。(40 代男性)
- クリスマスという外国の祭事を知ったのは、終戦 直後の暮れです。それまで米英と戦争をしていた のですから、小学生の子供にはクリスマスの話な どしてくれるものがどこにもありませんでした。 何かにぎやかな物事を教えてくれたのは、私の小 さな町に駐留した米軍部隊でした。終戦直後に やってきたこの占領軍は、暮れも押し詰まると兵 隊たちが宿舎の内外にクリスマスにちなんだ飾り をたくさん飾り、その後クリスマスキャロルとい う歌だと知ったのですが、そのたのしそうなメロ ディーをうたって,グループを作っては町内の雪 道を練り歩いていました。東北の北上川沿いの町 ですから、冬は雪。初雪は早い年で12月初めご ろ,暖冬でも決まって12月24日には見渡す限 りの真っ白な根雪に覆われるのでした。雪にトナ カイとジングルベルではありませんが、雪に馬橇 と馬の鈴がどうしてもクリスマスというと連想さ れます。岩手県は南部駒の産地です。トラックな どない当時,荷物の運搬は馬,馬車,馬橇(冬だ け)。数年後、高校三年生のとき、コーラスをやり

ました。男子校ですから男声2部合唱。全国高校 合唱コンクールの県大会に出場して, 課題曲「菩 提樹」をうたいました。クリスマスが近づくと ミッション系の音楽の先生が指導に来て, クリス マスキャロルと10曲ほど思えさせられました。 「ああ,これが数年前に、米占領軍の兵隊さんたち がクリスマスイブに歌っていた歌だ」と合点がい きました。しごかれながら覚えたクリスマスキャ ロルは、慰問用のものでした。それが東北一大き い刑務所の慰問だったのです。喜んでもらいまし た。お土産に、刑務所で作成したノートブックを 全員2冊ずつ頂戴してきました。そのノートに は、私の大好きだった日本史の授業の記録がぎっ しり詰まっていて, 今でも本箱の中に健在です。 高校三年生, 年が明ければ大学受験シーズンなの にのんびりとキャロルを楽しんだ年末でした。 (60 代男性)

- ・家には蓄音機がありました。でもこどもは触ってはいけませんでした。だから触ったことがありませんでした。今日、大人になってから蓄音機が触れるとは思いませんでした。(60 代女性)
- ・学校にも蓄音機があって、大好きな先生がいて宿 直のときに尋ねていくと音楽を聞かせてくれたの がうれしかったです。すっかり遅くなって先生に 手を引かれて家まで送ってもらったことを覚えて います (60 代女性)
- ・戦争中、満州で育ちました。前線に赴くまえの兵隊さんたちが、家をよく訪ねてきました。家は民泊をしていました。家にあった蓄音機を廻して、クラッシック音楽を聞き入っていた姿が今も忘れられません。あの若い人たちがそのあとどうなったのかわかりませんが、蓄音機というと、実家のあの日の光景が思い出されます。その後終戦になり、無一文の状態で、楽譜だけをポケットに入れ帰国しました。(70代女性)
- ・1970年から71年まで、ベトナム戦争の最中に特派員としてサイゴンに滞在しました。戦争で白衣の傷病兵があふれているのに、随所にあるキャバレーやミュージックホールでは歌姫がベトナムの歌謡ばかりではなく、アメリカのジャズやロックンロールなども歌っていました。昔の日本のように軍歌などではなかったようです。(60代男性)
- ・父は船乗りでした。いつも航海にでるとき見送り

にいっていたのですが、波止場でなっていた曲が「アニーローリー」でした。曲を聴いたら、父を送るときのさびしい気持ちや、帰りを待っている間のことが思い出されました。(60 代女性)

参加者の感想

- ・曲をゆっくり聴いていると過去にいざなってくれるようだった。会場の雰囲気がこの会にぴったりしていて、コーヒーや暖房に温まっていると心地よかったです。(40代女性)
- ・会が終わった後、参加者の A さんとお会いした とき、まだ耳に残るいくつかの曲のことをお話し ました。本当に良い機会を与えてくださいまして 感謝しております。(60 代女性)
- ・昔の風景が思い浮かんでくるような音色でした (20代女性)

当初、春、秋、冬と会を開く時期が一定しなかったが、現在は、12月初旬に開いている。実は、少人数での準備が大変なので、毎回お知らせが遅れ気味である。しかし10月頃になると、以前参加した人々から、「次はいつですか」と問い合わせが始まる。

運営上我々がもっとも配慮した点は、火傷などの 事故を起こさないこと。また参加者に話す自由を 持ってもらうと同時に、話をしなくても良い自由を 持てるようにしたことである。参加者の中には、イ ギリスのセンターで学んだ通り、最初は話ができな くても, 何年も会に参加する中で, 他の人に対して お茶を出すのを手伝ってくださるうちに積極的な姿 勢が見えるようになった人もいた。興味深いこと に、回数を重ねるにつれ、都合がつかない参加者か らも,回想を綴ったファックスが入るようになっ た。我々は、会の中で必ずそれを読み上げるように して、「いない人の参加」ができるようにしている。 また、ある年の会では、ご主人をなくされた80代 の方が、娘さんに伴われて参加されたことがある。 その方は、自宅にあったご主人の遺品の数十枚にの ぼる SP 盤を会に寄付してくださり、 音楽を聴きに いらしたのである。初めて出会う他の参加者が、自 宅で使っていたレコードに耳を傾け、語り合う姿を 見て、ご主人が回想法の会を通じてこれからも生き ていくことを感じとても喜んでくださった。高齢者 のソーシャル・ネットワークに関する報告による

と、友人関係がある状況での家族の不在よりも、家族がいる状況の中での友人の不在のほうが、より精神的に害をもたらすという(Fiori, Antonucci, & Cortina, 2006)。 会を通じて、人々の交流の場を提供することは、これからもそれぞれの参加者にとって意味を持つものと考える。

会の運営を重ねていくと予期しない出来事も発生 する。参加者の病気や死は、高齢者が参加する会で は、起こりうることである (Bruce, & Gibson, 1998)。開始当初から数えると、私たちの会でも参 加者数名が亡くなられた。一方で、高齢者の家族が 参加することにより、新世代の誕生が報告される場 合がある。今年は2名の新生児が生まれる。乳児や 子供をつれた参加者をどうするかという問題が、ス タッフのなかで議論されたことがあった。参加を初 めから制限するより、様子を見ようという意見が出 された。実際、子供連れの参加が毎年あるが、コン タクト・ザ・エルダリーでの見学で学んだように, 主催者がある程度どっしりと構えて、時にはユーモ アをもって静観するという態度の必要性を感じる。 子供とその家族は、高齢者にとって回想を促すきっ かけとなる。小学低学年の子供連れの父親の参加者 があったが、ある高齢者男性の参加者は、自分の 育った環境を思い出すよい機会だったと感想を述べ た。また、「家に何年も引きこもったような状態の子 供がいるのですが、参加させてもいいですか」とい う問い合わせをいただいたことがある。会の趣旨か らすると想定外の出来事であった。考えた末に、会 に参加することが直接引きこもりの解決にはならな いが、小さなコミュニティーを体験することはでき るのではないかと考え、母親と一緒に参加してもら うことになった。もちろん,他の参加者はその辺の 事情は知らないのであるが、見守ることにした。お 茶の時間に他の人々が話しかけてもその参加者は, おびえたような目をするだけで返答はしない。他の 参加者は、私たちスタッフの様子をうかがってこち らを見るので、最初の段階では私たちはただ黙って 大丈夫ですよというようににっこりするだけにし た。高齢者の参加者たちは私たちの様子を見て安心 したように、その参加者に対して普通にふるまい、 つまり相手が返答をしなくても、 愛想よく話しかけ ていた。そして、その口を利かない若い人を受け入 れ、いつものとおりにお茶を飲み、お菓子を食べて

いたのである。どこでスタッフが介入するのかは, 常に問われる問題であるが,集団の持つ効果を信じ てみるのも大切ではないかと考える。

回想法の会の運営が始まってから、高齢者の施設 や、福祉系の学校で蓄音機を使った集まりを持つ機 会をいただいた。高齢者施設の音楽療法の一環とし て、 蓄音機を使ってみたいということで機会をいた だいたが、曲の演奏の後、感想を問うと「みんない い」とだけいって涙ぐむ人、曲をきいて「これはタ ンゴね」とおもわず踊りだした人、何年も歌ってい なかった外国語の歌詞を思い出し口ずさむ人などが いた。しかし民間施設において、大人数が対象の音 楽療法に参加する場合には, 入所者の社会的背景が さまざまなために、選曲が大変難しいというのが率 直な感想である。学校では、若い世代の人々が蓄音 機の仕組みや独特な音に、新鮮な驚きと興味をもっ てむかえてくれた。ロンドンの回想センターでも, 高齢者のスタッフが学校に出向いて古いものの使い 方や, それにまつわる歴史の話をする世代間交流の 機会を持つことに積極的であった。蓄音機を使った 世代間交流の回想法を続けるうちに、このような機 会をいただけるようになったことは、おもわぬ喜び であった。この活動について、スケールなどの指標 を用いて,参加者の状態を数量化してみるという方 法もある。参加者の方たちは、おそらく協力してく ださると思うが、この回想法の会に関する限り、今 のところあまり考えてはいない。Cappeliez & O'Rourke (2006) らは、回想と健康に関する論文 で,回想に関する個人のスケールの限界について言 及している。この会に関する限り,数値による実証 だけにこだわらず、できれば生活のひとこまといっ たような自然の形をとりながら, 長いスパンでコ ミュニティーに参加していけないかと考えている。 「次はいつですか」と問い合わせがきて、人が集まっ て来るうちは、その会が必要とされている一つの指 標と考え現在の形を維持するつもりである。今後, 会をどのように運営していったらよいかということ に関しては、参加者の意見に耳を傾けるのが一番の 方法であると考える。時間, 資金, 人員の不足もあ り、現在この会は、年1回、多くて2回の運営が限 度となってはいるが、当初の目標どおり、今後も継 続をすることを心がけていきたいと考えている。

引用文献

- Bruce E., & Gibson F., 1998 Evaluator's report, Remembering yesterday, caring today, The European Reminiscence Network Conference (Vienna, Austria).
- Cappeliez, P., & O'Rourke, N. 2006 Empirical validation of a model of reminiscence and health in later life, *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, **61B**, No. 4, pp. 237–244.
- Contact the elderly 1999 Contact the elderly, Guideline for Group co-ordinators.
- Fiori, K. L., Antonucci, T. C., & Cotina, K. S. 2006 Social Net Typologies and Mental Health

- among Older Adults, *Journal of Gerontology*: *Psychological Sciences*, **61B**, No. 1, pp. 25–32.
- クライマン, A.; 江口重幸・五木田 紳・上野豪志 (訳) 1988 誠信書房(Kleiman, A.: The Illness Narratives—Suffering, healing and the human condition Basic Books Inc.)

黒川由紀子 2005 回想法 誠信書房.

- 野村豊子・黒川由紀子 1992 回想法への招待 筒井書房.
- 高橋良博・高橋浩子 2001 イギリスの回想センターに ついて 駒澤大学心理学論集, 3, 37-42.

(受稿: 2007.7.4, 受理: 2007.10.26)